



人生の三角波シリーズ

人間到る処 青山あり

第3回
出会い、そして結婚

※三角波：時化た海で方向の違う二つ以上の波が重なってできる三角形の波で、船の舵が取れなくなる危険な状態を言う
※人間到る処青山あり：死して骨を埋める場所は至るところにある。故郷を出て活躍すべきだとの意。

フォト・ジャーナリストの加藤節雄さんを以前から存じ上げていたが、人生経験をうかがう機会には恵まれずにいた。昨年、加藤さんが日本の文化を英国に紹介されてきた功績で外務大臣賞を受賞され、その際に披露された経歴をぜひもっと詳しくお聞かせいただきたいということでこの対談が実現した。

(センターピープル代表取締役 飯塚忠治)



飯塚 前号は、成人教室で日本語を学んでいる3人の英国人の一人の女性から「私のフラットにこない?」と誘われたというところで終わりましたが、英語を誤解したわけではなかったのですね。

加藤 彼女は最近日本から帰ってきたばかりで、日本製のカメラを日本から買って来たというのです。「日本製のカメラを買って持ち帰ると高く売れる」というセールストークがあって、買って来たのはいいのだけれど買い手がつかない! それ自体高いものですから、そう簡単には買い手は見つからないと私も思いました。若い女性にとって高い買い物カメラを、早く現金化したいということは理解できますよね。そこで私がカメラマンであることから私にそのカメラを買って欲しかったんですね。この説明を聞いて「なんだかほっとしたような、がっかりしたような……」。フクザツ!

飯塚 モスクワの出来事にしてもインターナショナル・スチューデント・ハウスでの仕事にしても、そして今回の話もすべてカメラという横軸が共通項ですね。芸は身を助けると言いますが、まさしくそれを地で行っていますね。それで?

加藤 何しろ私はプロ用のカメラを持っていましたから買うつ

もりはなかったのですが、暇もあつたし、一概に断るのも思ひ(日本人ですね)、カメラを見に行くことは行きました。それだけだったのですが……。それから1月後、私のフラットに泥棒が入り、後生大事にしていたカメラがドロンしてしまったのです。そのころになると、日本の多くの出版社から様々な取材依頼が入るようになり、英国、欧州と取材旅行が多くなっていました。今度は私が彼女に頭を下げて「～という事情で、あのカメラを使わせてもらえませんか?」と。結果的に彼女、ジルと結婚することになるのですが。

飯塚 ドロンしたカメラが彼女との仲を取り持った! 今になって振り返ると、この泥棒も粋な役割を演じたと言える?

加藤 結果的にはそういうことになりましたが、その瞬間は頭が真っ白でした。カメラは快く使わせてもらえることになり、地獄に仏に会った感じで本当にほっとしました。そこで彼女の日本行きのことをもう少し聞いてみたら、約1年前に英国からシベリア大陸横断鉄道を利用して日本に行って、数カ月前に帰国。成人教室で日本語に磨きをかけていたところだったようです。

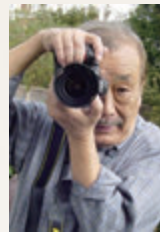
飯塚 そうしますと加藤さんが英国に来るためにシベリア横断鉄道で、彼女はその逆ルートを通じ時期に日本に行ったこととなりますね。この鉄道は単線ですからどこの駅で列車が待ち合わせをする場面があったと思いますが、そのときプラットフォームをはさんで目と目で挨拶をしていたかも……。これは私のロマンをかき立てさせる想像なのですが、それにしても赤い糸で結ばれていると言いますが、お二人がパートナーとなるのは偶然ではなく、必然の重なりのようにも見えますね。

加藤 こうして、英国での生活が3年にもなり、ジルと将来結婚することも決まり、そろそろ日本に帰国をしようとジルに提案したのですが、あまり気乗りしない返事でした。日本で生活

鉄道のリールは前に伸びているが、目の前が崖だったら? ときには崖のような困難を飛び越えつつ、文字通りシベリア横断鉄道を使って英国にやって来たフォト・ジャーナリストの加藤節雄さん。「フリーランスの仕事は決して『フリー』な状況ではないですよ」——1970年代からフリーのジャーナリストとして英国で活躍する加藤さんの半生の紆余曲折を振り返る。全5回シリーズ。

加藤 節雄さん プロフィール

1941年……………5月5日端午の節句に東京に生まれる
1966年……………早稲田大学新聞学科卒業
1966～69年……キーストン通信社東京支局でフォト・ジャーナリストとして勤務
1970～90年……フリーランス・ジャーナリストとして英国、欧州のニュース・トピックスを日本のメディアに提供
1991～2002年……在英邦人向け情報紙「日英タイムス」の編集長として活躍
現在……………日本クラブ会報「びっくべん」編集長、日本クラブ理事。著書多数



したときの印象がいまひとつだったみたいで……。日本社会の持つメール・ショービニズムが、自由な考えを持つ彼女には相容れない文化だったみたいです。

飯塚 メール・ショービニズムというのは男尊女卑ということですか?

加藤 基本的にはその通りで、それがたまらなく嫌だったようです。でも彼女は「セツオ、私の2つの願いを聞いてくれたら一緒に行ってもいいわ」と。「もちろんだよ、それは何?」と聞くと、一つは日本で本格的に陶芸の勉強をしたいので良い先生を探してくれること、もう一つはいつでも帰れるように往復航空券を用意すること、でした。

飯塚 そうですか。そのころからジルさんは陶芸にご興味をお持ちだったんですね。今、陶芸家として活躍されているのを存じ上げていますが、ここからジルさんの陶芸家としての道が始まったと言えるようですね。当時は1974年、英国から日本に行き生活するというのはなかなかできることではなかったと想像できますから、万が一、日本で生活がうまくいかなかったときは英国に帰れるという心の安心が必要だったんですね。加藤さんはこの2つに快諾をされた。こうして将来の伴侶となるジルさんと加藤さんは日本に帰国、日本で晴れてご結婚!



東京・麻布十番の披露宴会場にて(1974年)

本コラムの過去記事は、下記アドレスでご参照いただけます
www.centrepeople.com/japanese/article

Presented by
centre people
Recruitment Consultants

情報を発信し続けるセンターピープルは、人材紹介、派遣のエキスパートです。
誠意をもって心をこめたサービスを企業様、ご登録者の皆様に提供することを常に目指しております。